

荒田 次郎君 大変悲しいことに君にお別れの挨拶を申し上げなければならなくなり、痛恨の極みです。

君とは、岡山大学医学部に入学して以来、半世紀以上にわたって、付き合っ  
て参りました。特に、1990年に私が川崎医大から岡山大学に移って以来、私より  
2年前に、高知医科大学から岡山大学の教授で帰られていた君から、先輩教授と  
して、数々のご助言をいただき、本当にありがとうございました。

1999年からの私の医学部長時代には、前の年に病院長になられていた君に大  
変助けをいただきました。医学部長になって、医学部を大学院大学にするために、  
人事を始め、多くのむずかしい問題がありました。その都度、君の教授室に出掛  
け、私は「困った、困った、なんとか助けてくれ」と泣き言をいって、君の助け  
を求めました。

その折々、君は「火の玉になってやらなきゃ」と、私を励ましてくれました。  
私が医学部長としての仕事が出来たのは、君の強い支えがあったからこそです。  
深く感謝いたしています。

君は大変温厚な人柄でしたが、君の内部では、マグマが燃え盛り、大変激しい  
ものがあったことと思います。その君の「うちなるもの」の強さが、病院長とし  
て、皮膚科教授として強いリーダーシップを発揮され、多くの輝かしいご業績に  
なったと思います。ご定年後は、私が立ち上げた財団法人岡山医学振興会の役員  
として、財団の寄付集めを始め、いろいろのことについて、助けていただきまし  
た。

昨年、老人ホームに入っておられた君に、時折、お会いして、コーヒーを  
飲んだり、軽い食事などしながら、世間話を楽しんでいました。お元気そうでし  
た。

今年の2月にお伺いしたとき、突然、君から「肺がんだ。その内、痛みが来る  
と思う。治療はしないことにした。この年になって、治療しても医療費の無駄だ」  
と打ち明けられました。

その瞬間、孔子の次の言葉が私にひらめきました。「命なるかな、この人にし  
てこの疾（なやみ）あるか」。

火の玉のように生きられた君のような人でなければ、天命を受け入れ、人生の  
達観の境地に至ることは出来ないと思いました。そして、人生を達観された君に  
私は強く心を揺さぶられて、しばらく無言の時間が過ぎました。

「うちの鹿肉は美味しいですよ。どうですか」とそのレストランのシェフに話  
しかけられ、「じゃ今度はワインを持って来るから」「そうしよう」、と話しあっ

たのが、懐かしく思い出されます。フランスに留学された君は、ワインの勉強をもっぱらされたようです。ワインを大変好まれました。

がんも時折、自然消滅することがあります。君のような強い意志の人では、がんも退散するのではないかと祈りつつ、老人ホームを後にしました。しかし、悲しいことにそうなりませんでした。

その時が、お元気な君にお会いできた最後になりました。ただ、君の示された生き方は、現世で悟りにほど遠い私どもに、非常に貴重な教訓を与えてくれます。

いま、君は天上にて火の玉になっておられると存じますが、残されたご家族様を温かくお守り下さり、また、君に教えを受けた私どもをお導き下さいますよう、切にお願いいたします。

君からのご生前のご厚誼に対して深い感謝の念を捧げ、ご冥福を謹んでお祈りしつつ、私の挨拶といたします。